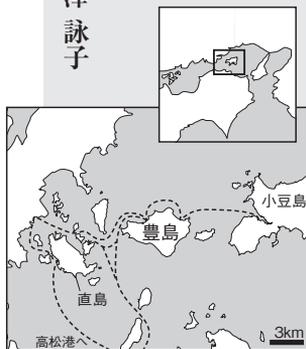


世代間交流による 島内福祉の充実を目指して

移住者の職能を活かす仕組みづくり

はぐはぐ・てしま代表 小澤 詠子



豊島：小豆島の西3.7km、標高340mの壇山を中心とした山がちの島で、海岸沿いと丘陵地に6つの集落がある。面積14.50km²、人口764人(令和2年12月1日現在)。水が豊富で古くから稲作が営まれ、沿岸漁業に加えてオリーブや柑橘栽培、酪農、豊島石の加工が主産業だった。

《団体名》 はぐはぐ・てしま(香川県土庄町)

《事業名》 小離島に移住した医療福祉系専門職能と子育て世帯が地域福祉に与するためのインフォーマルな人材育成・交流促進事業

島内福祉の課題解決に向けて

近年の豊島^{てしま}の移住者を見ると、看護師や保育士、介護福祉士などの医療福祉職従事者の割合が安定している。今回、私たちは、①その背景構造を明らかにして、②私が豊島の看護師として十年来向きあってきた地域課題がその構造にどう位置づけられるのかを確認し、③未来志向型のテスト事業での検

証を行なった。

①では、明治大学大学院の園田眞理子教授の指導を受けながら、人口動態や福祉予算の再分配構造から推測される島内老人福祉事業について分析した。その結果、特定高齢者や軽度要介護者、保育事業に対し、公的サービスが届きにくい構造が明らかとなり、この課題を「豊島の福祉を考える協議会部会」で共有することができた。

豊島は、独居化や家族による介護力の低下などが進み、在宅医療が困難なっている。私に向き合ってきた②地域課題とは、この島で最期まで暮らすためには、島内唯一の特別養護老人ホーム「豊島ナオミ荘」の将来構想や人材確保・育成に対して、全島的に取り組むべきである、というものである。これが①と連動し、介護予防事業などの展開にもつながると考えている。

③は、そのテスト事業として、ナオミ荘に有資格の移住者を配置し、土庄町の介護予防事業を受託できるようにコーディネートした。また、地域展開の拠点づくりを念頭に、空き家調査、移動販売への同行や商店主インタビューによる福祉ニーズの把握、勉強会や視察などを行なった。

医療福祉職を支える環境づくりを

戦後四〇〇〇人を数えた豊島の人口は、現在約七五〇人に減少、高齢化率は五五パーセントにのぼっている。診療所に看護師として勤務する私には、

人口減・高齢単身世帯増という環境の変化により、島の命そのものがじわじわと締め上げられている現状のように思える。島内の看取りの場でもあるナオミ荘の役割は、高齢福祉だけでなく、移住者の雇用の確保という点か



ナオミ荘での介護予防教室の様子。

らも年々拡大している。

豊島の医療福祉現場の変化は著しい。とりわけ、要介護二以下の高齢者の特養入居が不可能となったことで、表情も快活な軽度要介護状態の方が、認知症などのために島を離れるケースがある。逆に、本人が自宅で最期を迎えたいと望んでも、不本意な施設入居となる事例も増えている。私は、これが②地域課題の象徴であると捉え、移住者の職能を地域福祉に活かしながら、ともにこの課題解決を模索していくことが重要であると考えている。

「地域ネットワーク」づくりは、互助・共助に基づく「地域包括ケア」として一般的に認識されている。元来、互助力の強い離島は、先人の経験などから学ぶこと（温故知新）が多いように思う。その反面、医療福祉職の専門化とコンプライアンス強化が進むなか、島の実情はやや特殊性を帯びているともいえる。医療福祉職は、しばしば「感情労働」と

も表現されるが、それはメンタルヘルスの管理が特に重要だからである。もしメンタルを支える環境がなければ、従事者は燃え尽きてしまい、十年単位での継続は難しい。

豊島では、「あの人が逝ってしまった」など従事者の感情が揺さぶられる体験が、高頻度かつ長期的に更新され続けていくように感じる。医療福祉職は、担当する高齢者の全プロセスに伴走し、当人の覚悟や老化による不条理に耐える苦渋の表情に日々接している。豊島で島内葬を出せなくなつて久しいが、地域葬が島の方々の死生観を培う役割（グリーンワーク）を果たしていたことを、いまさらながら実感している。この故人を偲ぶ機会の喪失により、生死を身近に感じていた記憶や健やかな地域コミュニティを育もうとする島人たちの感情が風化し、かつては当たり前にあつた互助の歴史などのアイデンティティを揺るがしている。そして彼らと接する医療福祉職の孤軍化にもつながっていると思う。

一方、幸いにも私たちは、在宅や特養で家族や友人などに囲まれて天寿をまっとうされる方の顔が、どれほど穏やかで美しいものかも知っている。ただし、この特権は守秘義務に裏打ちされており、個人の胸のなかに納めるだけである。医療福祉職が、専門性を損なわずにこうした日常を生き抜いていくためには、やはりメンタルを支える環境が不可欠なのである。

職能を活かした

地域の記憶や関係性の再構築

徳島県神山町にある「神山つなぐ公社」への視察から得た気づきは大きい。生活支援コーディネーターでもある田中泰子さんは、山深い同町で生きてきた山守たちを映像に収め、地域で自主上映を重ねてきた。この取り組みが、多世代の住民有志による間伐などの森林保護活動の実施に結実しており、同公社との交流では、地道に活動することの意義や意欲の継続について、有意義なお話を伺うことができた。

特に、医療福祉職がその職能を活かして「地域の記憶や関係性を結び直していく」という、今後の地域福祉に対する活動イメージを得られたのは成果である。これは、医療福祉職のメンタルヘルス支援にも有効だと思っている。

実際、健康講話で豊島の歴史に触れたときの事例では、九三歳の参加者が、後日、きれいに保存された七十年ほど昔の新聞の切り抜きを見せてくれた。このような何気ない交流に潜む偶然が、

私たちに感動を与えてくれる。仮説ではあるが、豊島に子育て世帯や医療福祉職が安定して移住して来るのは、こうした感性への共感が大きいのではないだろうか。つまり、世代間の交流を通じて島の地域福祉を継続的に再定義していくことが、島内福祉の課題の解決にもつながっていくように思われる。

この着想から、現在、私は仲間を募つての回想療法（自分の過去を話すことで精神を安定させ、認知機能の改善を図る心理療法）を、診療所の日常業務に織り交ぜ、交流をしながら豊島の文化を記

録（アーカイブ）する事業に取り組み準備をしている。

ヨガ教室による世代間交流

このほか今回の事業では、ヨガインストラクター・かわだゆきみ氏を招いて全四回のヨガ教室を開催した。島内複数の集落から、〇〇九三歳の住民が一堂に会する貴重な交流の場となり、参加者から大変好評だった。

じつは、私自身は〇歳と三歳の子を抱えながら本事業に取り組んできた。苦労は多かったが、同様に子育て中の友人たちと助け合うことで無事に遂行することができたと考えている。特に、島出身者で育児メンバーの一人である藤崎恵実さんが合流し、住民と移住者のハブを担ってくれたことが、円滑な事業運営につながった。

私たちは、島内のさまざまな育児世帯や子孫を育ててきた諸先輩たちと「知り合い・助け合いたい」と思っている。移住してきた育児世帯が、この交流を通して、その思いを多くの方々

離島人材育成基金 助成事業事務局より

本助成事業では、申請事業の効果や影響が一時的なものではなく、持続可能なものであるかどうかを評価の観点の一つとしています。理由は、事業を実施することで広がるネットワークを活かし、地域づくりへの継続的な関わり方を模索しながら活動に取り組んでいただきたいからです。

「はぐはぐ◎てしま」の事業は、島内の商店や元乳児院長へのヒアリング、移動販売に同行しながらの聞き取り調査などにより島の現状を把握するとともに、乳幼児から高齢者まで参加できるヨガ教室の開催を通じた、普段は接する機会の少ない育児世代と高齢世代を結びつける場づくりなど、長期的な視点にたった設計がなされているように感じます。実際、子ども世話の申し出る高齢者が現れたり、はぐはぐ◎てしまのメンバーが保育サークルを立ち上げるなど、住民の方々の主体性を引き出すような成果につながり、事業に副次的な広がりがみられます。

この取り組みは、自分たちの住む島で必要とされているもの・ことを具体的に把握・分析し、その課題解決策と進むべき方向を住民の方々と議論しながら、着実に実践している点において、持続可能性の高い優良な事例です。



写真：津久井珠美

小澤詠子（おざわ うたこ）

香川県生まれ大阪府育ち。2000年、立命館大在学中に初めて豊島を訪れ、07年に移住。住民への思いと岩井敏恭医師（自治医科大学卒）からの勧めで、看護師資格を取得・修士課程修了（看護学）。11年より豊島巡回診療所（現・小豆島中央病院）にて離島医療に従事。

に伝えることで、地域への自己紹介にもつながった。実際に、私たちのメンバーである茂木まりやさんは、与えられた場所や遊具で、決められた遊びをするのではなく、自然のなかで「生きる力」を育てたいというニーズに応え、事業の半ばに自主保育サークルを立ち上げた。平井絵美さんも、現在、棚田の休耕田に公園（遊具など）を夫と自主製作するなど、交流を広げている。

目の前にいる離島の人材

私は二〇年前、豊島の産廃事件を論文にするためこの地を踏んだ。その際、住民運動のリーダーは「事件を通して一番変わった、成長したのは、自分たちだった」という実感を語った。この一言を、いま改めて噛みしめている。人材は、常に目の前にいる。専門性の有無を問わず、目の前の人々や出来事に

価値を見出しながら日常を送る住民が増えることで、足腰の強い地域づくりにつながっていく。島は昔からそれを実践してきた。そして、これからもそうありたいと願う。

本事業を通じて、私は「離島における人材」についての認識を新たにしたい。これを対人関係などに活かすことで、とたんに日常が賦活され、私は感動しながら毎日を送ることができている。